

古事記読書会「弥栄(いやさか)の会」第2回 報告書

開催日 第3土曜日 2018年10月20日(土) 9時半～11時

開催場所 中日本建設コンサルタント(株) 東京支社会議室(四ツ谷)

参加者 6名(会員4名、サポーター1名、会員のご家族1名)

内 容

(1)参加者自己紹介

(2)趣旨説明(リーダー)

いろいろな場面で人生の進む道を判断するときの心の拠り所が欲しいと思い、阿部先生の新釈古事記伝に行き着いた。たまたま、その頃にセメント新聞の「あぐる」という一面コラム欄4回の寄稿を依頼され、古事記を題材に「袋背負いの心」「弥栄の心」「あかいだき」「受け日」を発表。会員の自主的な発案により読書会を企画。土木技術者女性の会の東日本支部の活動として参加者募集などのご支援をいただけることになった。

(3)朗読

阿部國治著・栗山要編「新釈古事記伝 第1集 袋背負いの心」を車座になり全員で順番に輪読。新しいメンバーが半数でしたので第1集・稲葉の白兔から開始。約1時間半で、最後まで読破。

(4)読後感

○今回は、得に大国主命の母である刺国若比賣について、苦しい心模様や、子の神様たちへの愛を思いながら読みました。

もし私が母だったら、兄弟の神様たちをひたすら責めてしまうと思いますし、大国主命の立場であったなら、理不尽なことと憤慨すると思います。厄災や問題は自分自身で解決しなければならない、ということをしみじみと感じました。

あと、大国主命の生き返らせた二人の貝のお姫様のことが不思議な存在で、物語的で楽しかったです。

○「赤猪抱き」の意味である、「正しいことをしても、すぐには世の中から認められない。苦難の連続。死を覚悟して取り組め。天を相手に仕事をせよ」は、西郷隆盛の「人を相手にせず、天を相手にせよ」の信念と同じであることを教えていただき、西郷さんの志を、ほんのわずかでも理解できたことを嬉しく思いました。

繰り返し読むこともよいですね。

次回予定 2018年11月24日(土)9時半～11時@中日本建設コンサルタント(株)会議室

前回の解散時に八岐大蛇にしようかと考えておりましたが、阿部先生の本の構成上、八岐大蛇は最終の第七集になっており、改めて読み直してみると、それまでの背景を味わっていないと言葉の意味も伝わらない大変難しい内容になっておりました。

そこで次回は順番どおり第二集を味わいたいと思います。

以上